

令和4年度  
劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	ロームシアター京都（京都会館）	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 ( 総 額 )	33,225	(千円)
	公 演 事 業	24,507 (千円)
	人 材 養 成 事 業	2,750 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	5,968 (千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	Sound Around 002	2022年6月11・12日	出演(メインアーティスト、ホスト): 正直(時里充、小林椋)、他	目標値	210名
		ノースホール		実績値	234名
2	ディミトリス・パパイオ アヌー 「TRANSVERSE ORIENTATION」	2022年8月10・11日 ※	コンセプト・ビジュアル・演出: デ イミトリス・パパイオアヌー 他	目標値	1,200名
		サウスホール		実績値	1,283名
3	Noism×鼓童 新作公演 「鬼」	7月17日	演出振付: 金森穂 演奏: 太鼓芸能 集団 鼓童、舞踊: Noism0、Noism1	目標値	1,220名
		メインホール		実績値	912名
4	クロノス・クアルテット 《ブラック・エンジェル ズ》&《ディファレン	2022年9月24日※	新型コロナウイルス感染症拡大に伴 い、アーティストの来日が難しくな り中止。	目標値	630名
		サウスホール		実績値	—※
5	木ノ下歌舞伎「桜姫東文 章」	2023年2月22・23日	作: 鶴屋南北、監修・補綴: 木ノ下 裕一、脚本・演出: 岡田利規 他	目標値	1,220名
		サウスホール		実績値	973名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## (2) 令和4年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	劇場の学校	2022年7月18日 他	講師：山城大督、木田真理子、岡田利規	目標値	310名
		ノースホール 他		実績値	199名
2	リサーチプログラム	2022年7月7日 他	リサーチャー：荻島大河、彦坂敏昭、立花由美子、小倉千裕	目標値	105名
		会議室 他		実績値	61名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和4年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	芸能の在る処 ～伝統芸能 入門講座～	2022年10月7日 他	メイン講師：木ノ下裕一、ゲスト講 師：中村壺太郎・児玉竜一 他	目標値	150名
		ノースホール 他		実績値	414名
2	プレイ！シアター in Summer 2022	2022年8月13日 他	出演：京都市交響楽団 他	目標値	12,000名
		メインホール 他		実績値	6,166名 ※一部
3	シアターデビュー促進プ ログラム	2022年9月4日 他	演目：「およげ！ショピニアーナ」 演出・振付・出演：中間アヤカ 出 演：佐藤健太郎、垣尾優 他	目標値	325名
		京都市呉竹文化センター他		実績値	411名
4	アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス	2022年4月30日 他	出演：大所帯非楽器アンサンブル POLY!、米子匡司	目標値	200名
		3階共通ロビー		実績値	117名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>当劇場は、文化芸術の継承・創造・発信拠点として、京都における文化芸術のインフラ構築のためのハブ機能を果たしていくとともに、「劇場のある空間」を中心として、人々の暮らしの感覚と芸術とが相互に繋がることで、京都に「劇場文化」をつくり、根づかせることを社会的役割(ミッション)としている。このミッション実現のために、「世界水準において質の高い作品鑑賞の機会を定期的に提供すること」、「次世代の人材を発掘し育てること」、「生活と芸術の接点となる事業を展開すること」が重要だと考えている。本助成対象事業は、まさにこの根幹をなし、ミッションを体現するものである。特に、現在の京都において、一定規模以上の現代的なプログラムを上演できる劇場は限られており、広域的に西日本地域にとっても貴重な場となっている。人材養成事業については、研究・批評と実践の場をつなぐ専門的人材を対象としたものに加えて、13歳～18歳の若年層を対象とした事業に力を入れている。また、舞台芸術の入り口となるべくホール以外でのプログラムや講座を開催し、地域の人々と劇場との新しい接続を試みている。公演事業、人材養成事業、普及啓発事業のバランスが図られ、ミッション実現に向けての事業構成は適切で、年を経るごとに整ってきている。</p> <p>新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、公演事業の1演目がアーティストの来日が難しくなり中止。また、1演目が国際輸送の混乱により実施が危ぶまれたが、日程変更と公演回数の調整により開催にこぎつけることができた。人材養成事業、普及啓発事業においても、感染拡大が見受けられた夏の時期は参加者を絞って実施せざるを得ず、目標値に達しなかった事業が出た。これらの点に関しては予定通りに進められたと言えないが、本年度は致し方なかったと自己評価している。なお、秋以降は徐々に来場者数も戻りつつあったことから、次年度以降、コロナ禍前の目標値に近づけることを目指す。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>●文化的意義 地域において、中規模以上の作品鑑賞機会を期待する声が多い(インターネットアンケート調査報告書より)。今後も継続して、一定規模以上の質の高い舞台作品を定期的に上演することが地域のニーズに応え、人々の鑑賞機会及び文化芸術活動の拡大ひいては人材育成に資すると考えている。また、プログラムディレクターのもと、特徴的なラインアップを組み、地域の人々の関心を喚起している。人材養成事業「リサーチプログラム」においては、その成果となる報告会や「紀要」と称している報告書は一般公開している。全国の公共劇場スタッフにとって、重要なリソースとして活用できるものを発表している。</p> <p>●社会的意義 海外アーティストの招聘により、舞台芸術に限らず、コロナ禍で途絶えている地域の人々と世界の出会い、国際交流の場を生み出すことができた。人材養成事業「劇場の学校」では、中高生が舞台芸術を体験するという事に留まらず、表現活動において必要な想像力、他者との対話、身体への意識が、これからの社会を生き抜く術であると考え、参加者とともに劇場での学びの場をつくっている。参加者アンケートにおいても高い数値の結果が得られている。普及啓発事業「シアターデビュー促進プログラム」においては、大人と子どもと一緒に舞台芸術を鑑賞する機会を提供できたとともに、外出する機会が減り孤立しがちな子育て世代の交流を促した。</p> <p>●経済的意義 これまで京都になかった規模の劇場が稼働することにより、地域の舞台芸術関係者の雇用を生み出し、活性化を促している。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

●【公演事業】目標は以下の5項目とした。

①観客満足度 85%以上を目指す。②舞台芸術の関心の向上、再訪の希望者 85%以上を目指す。③全体で有料入場者数を設定席数の 78%以上まで増加させる。④25 歳以下の観客を全体の 20%(国内演目)、18%(海外演目)まで向上させ、18 歳以下の観客は各公演 10 人以上の購入者を目指す。⑤ロームシアター京都のプログラムだから見に来たという観客を 10%まで増加させる。

【達成度】①は平均 72.5%と目標値を下回った。実験的・挑戦的な公演が多く賛否が分かれたと思われる。ただし②は平均 89.25%と目標値を超えており、舞台芸術に対する期待値は高いことがわかる。③について、有料入場者数は達さなかったが、入場率は「Sound Around002」(事業1)が 97.5%、「ディミトリス・パパイオアヌー」(事業2)が 89.59%と高い数値となった。④の集客については課題が残ったため来年度以降も若い観客層の開拓に取り組む。なお、Noism×鼓童 新作公演「鬼」(事業3)は、太鼓部のある高校に働きかけた結果、100 枚以上の購入があり、他と比べて高い数値となった。⑤についても目標値に届かなかったが、5%未満(2019 年度)→7.5%(2023 年度)と年々微増していることから、リニューアルオープン以降の我々のプログラムに対する理解が拡がり、継続実施の成果が出ている。

●【人材養成事業】対象が大きく異なるため事業別で目標を設定した。

「劇場の学校」①受講満足度を 4.9 ポイントまで増加させる。②参加後の舞台芸術に対する関心度を 4.8 ポイントまで増加させる。③受講者の将来展望の向上度を 4.5 ポイントまで増加させる。④応募者数 80 名以上を目指す。舞踊コースでは舞踊の舞台出演が未経験の応募者が 20 パーセントを目指す(多様な参加者が集ることを期するため)。

【達成度】①と②はわずかに指標数値に達さなかったが、大変高い数値を得た。特にメディア表現の①は 4.93 ポイントと特に高かった。③については例年より数値が低かった。原因について講座内容を振りかえり、検討を要する。④の応募者数は目標数値を下回ったが、演劇コースは定員以上の申込があり抽選を行った。舞踊コースにおいては未経験者の数値があがらないため、来年度以降の内容を再考する。

「リサーチプログラム」⑤応募者数 12 名以上を目指す。⑥最終報告会の参加数 50 名以上を目指す。

【達成度】⑤については指標数値に達していないが、こちらが対象とする人材が定員以上はコンスタントに集まっており、継続実施の成果が出ている。⑥についても指標数値に達していない。その代替案として、報告会の様子を後日インターネット配信し、広く成果を公開した。

●【普及啓発事業】目標は以下の6項目とした。

①受講者・観客の満足度が 85%以上を維持する。②舞台芸術の関心の向上、再訪の希望者が 85%を維持する。③定員及び設定客席数の 90%以上の来場を達成させる。④若い年代(10 代、20 代)の参加が 40 パーセント以上あること。⑤来場者数が 10,000 人以上あること。⑥映像ライブ配信のアクセス数が 1500 件以上あること。

【達成度】①は全体として達成。「プレイ!シアターin Summer」(事業2)が 93%、「シアターデビュー促進プログラム」(事業3)が 92%と、子ども向けの事業は充実した結果となった。②は 90%以上の高い数値で達成でき、普及啓発事業が舞台芸術の入り口として、関心を広げる一助になっている成果がみられる。③は「芸能の在る処～伝統芸能入門～」(事業1)「シアターデビュー促進プログラム」(事業3)について目標値を大きく上回り、増席対応を行うほどだった。固定しないオープンスペースで実施した「ホリデー・パフォーマンス」(事業4)では催しの賑わいとして適数の観客が集まった。④は令和3年度が 4.9%、令和4年度が 15%と向上はみられるが、若年層の参加は、引き続き課題と対策を検討する。⑤は目標の指標数値に達さなかったが、席を固定しないオープンスペースでの催しの賑わいとしては適数の観客が集まっていた。また、指標の数字を高く見積りすぎていたと考える。⑥は件数が落ちた。ただ、コンサートへの入場者は昨年度より増加傾向にあるため、配信よりもリアルでの参加に需要があると考えられる。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

##### ●【公演事業】

・デイトリス・パパイオアヌー 「TRANSVERSE ORIENTATION」

計画:2022年6月23日(木)~25日(土)計3回⇒実施:2022年8月10日(水)・11日(木)計2回

新型コロナウイルスの影響により、舞台美術の国際輸送(海上運送)に大幅な遅れが生じ、計画日程での開催が不可能となった。公演日1日減・公演回数1回減での実施だったが、開催中止の可能性があったものを、カンパニーや国内の開催館と密に連絡を取りあい、この時期に大型招聘公演実現できたことは大きな成果であると自負している。

・クロノス・クアルテット 《ブラック・エンジェルズ》&《ディファレント・トレインズ》

計画:2022年9月24日(日)⇒中止

新型コロナウイルスの影響により、公演日までにアーティストが来日することができなかったため。

・Sound Around 002、Noism × 鼓童 新作公演「鬼」、木ノ下歌舞伎「桜姫東文章」

適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。

##### ●【人材養成事業】

・劇場の学校 適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。

・リサーチプログラム 計画に沿った期間で実施。適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。交付申請段階では、最終報告会の日程が決まっていなかったが、リサーチャー確定後、各自の予定を調整して、しかるべき段階で決定した。

##### ●【普及啓発事業】

適切な期間で、当初の予定通り事業を実施した。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

##### ●【公演事業】

クロノス・クアルテット(事業4)が公演中止となったため、当初の計画から変更となった。ただし、実施された公演については、当初予算の20%の範囲内での調整に収まるよう、事業全体でバランスをとり、当初の予定通り事業を実施した。

##### ●【人材養成事業】及び●【普及啓発事業】

6事業とも、適切な事業費で、当初の予定通り事業を実施した。感染予防対策のため、参加者数を絞った事業もあり、事業の対象者数で考えると一人当たりの経費は効率的ではないと評価されるかもしれないが、コロナ禍の状況では致し方ないと考えている。また、人材養成事業については、当劇場では、一般的な費用対効果の考え方より長期的なスパンで効果測定をすべきだと考えている。このことに関して、独自指標の設定を目指すとともに、社会的コンセンサスをとる努力を引き続き行っていく。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場は、公共劇場やフェスティバルでの従事経験のある専門の人材を開館準備から擁してきた。さらに、他劇場・フェスティバルの芸術監督やスタッフ、アーティストと将来的な展開について意見を交わすことで劇場間交流が促進され、我々の技術・制作スタッフにとって、様々なノウハウを蓄積することができている。新型コロナウイルスの影響による対応や海外アーティストの招聘業務にあたっては、他地域の公共劇場とのネットワークが活かされた。また、2022年度は特に公演事業・人材養成事業・普及啓発事業が有機的に連動した事業展開を推し進めることができた。

#### ●【公演事業】

「Sound Around 002」では、「即興/変化」をテーマに公演と展示が融合した挑戦的なパフォーマンスを実施。音楽だけでなく、他ジャンルに関心のある人たちの興味も喚起することができた。一日中出入自由で鑑賞可能というスタイルは、会場となったノースホールの活用の可能性を拓ける契機にもなった。「Noism × 鼓童」の新作は、メインホールをダイナミックに使った作品となり、音楽とダンスの客層が合わさった。小学生と保護者対象のワークショップでは、身体で表現する楽しさを知る機会となった。「ディミトリス・パパイオアヌー」では、多くの観客が集まり、海外招聘公演を継続実施することで、観客の定着、関心の持続ができています。終了後のトークにも多くの観客が残り、熱心な質問が次々にあがり、アーティストから直接話をきける貴重な機会を創出することができた。専門家からの評価も高く、日本劇団協議会機関誌『join』アンケート特集「私が選ぶベストワ 2022」において、複数名の識者から本演目が挙げられた。「木ノ下歌舞伎」では、本公演の前哨戦となるトーク「“桜姫東文章”に挑む 木ノ下裕一 × 岡田利規」(2021年夏)の摘録を当劇場ウェブサイトに掲載していたが、公演が近づくのと徐々にこの記事のアクセス数が増え、鑑賞の手引きになった様子が SNS を通じて窺うことができた。アーティストの稽古場レポートやインタビューなどを丁寧に紹介してきたことが公演広報や鑑賞の手引きとして活用される好例を生んだ。「神話はぎとる舞踊の妙」(日本経済新聞:内田洋一)、「木ノ下歌舞伎が表す社会の多層性」(京都新聞:三好好彦)等、記名のレビューが各紙に掲載されるなど、注目度が高い公演となった。

#### ●【人材養成事業】

「劇場の学校」は、演劇・ダンスに加えて、メディア表現コースを設けているところが特徴であり、ジャンル越境的な公演事業と繋がる成果を出している。各コースともにアシスタントを務める若手アーティストと講師のチームワークで運営されており、若手アーティストのワークショップ講師研修の場としても機能している。「リサーチプログラム」では、舞台芸術の研究者を学術の場から実践の場である劇場に招き入れ、研究と実践が互いに影響を与え合う回路をつくり、舞台芸術、特に劇場という機能の拡張を試みている。公演事業や普及啓発事業を直接のリサーチ対象に設定するなど、事業間連携を強め、より実践的なリサーチを可能としている。

#### ●【普及啓発事業】

「芸能の在る処～伝統芸能入門講座」は、歌舞伎・京舞・宝塚歌劇をテーマに、劇場史や上演されてきたもの、これからの劇場の役割まで、「劇場文化をつくる」ことを理念とする当劇場ならではの内容となった。聴覚障がいへのアクセス支援では23件の利用があり、取り組みの認知が広がっている。「プレイ!シアター-in Summer」では、劇場の普段は立ち入ることができないエリアに足を踏み入れてもらう機会をつくるなど、劇場をより身近に感じてもらえるよう工夫を凝らした。京都の大学と連携し学生がスタッフとして参加したり、地元のクラヴスペースと共同企画したりするなど、地域の連携にも寄与することができた。「シアターデビュー促進プログラム」では、関西拠点で活動するアーティストに新作委嘱し、当劇場初の子ども向けオリジナル作品を製作。各会場の近隣住民が多く来場し、全体としても京都市内在住が 8 割を超えるなど地域密着型の公演として企画趣旨に合致した事業となった。「ホリデーパフォーマンス」で特筆すべきは、参加アーティストが、Sound Around で新作を発表したり、劇場の学校の講師を務めるなど、他事業への登用も増えており、当劇場事業におけるの導入的な役割を果たしている。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

### ●【公演事業】

・Sound Around 002 新しい音楽との出会いをコンセプトにする企画意図どおり、パフォーマンスや劇場空間の使い方において多彩なアプローチの方法に新たな発見や面白さを感じた観客アンケートや公演評が集まった。また、山田亮太氏によるパフォーマンスや会場の様子を見ながら書き綴ったテキストから生まれた詩が、改稿後に「ユリイカ」(2022年9月号)に掲載されるなど、新たな拡がりも生まれた。

・Noism×鼓童、ディミトリス・パパイオアヌー ツイッターをはじめとする SNS やアンケートからは、感動と驚きと興奮が窺え、「京都で観ることができて大感激です」「また観たい」といった声が多数寄せられ、地域の文化芸術関係者、観客に刺激を与える公演となった。

—公演評より抜粋—(ロームシアター京都 WEB マガジン掲載)

Noism×鼓童「重要なのは、その音と間(ま)の不測の連なりこそが、奏者と踊り手、双方の身体を共振させると同時に緊張をもたらしている点だ。左右二手に分かれた楽器奏者と舞台上の舞手たちは、互いの気配を探りつつ演じていたに違いない。五感以上に第六感に委ねられたその動きは、人間の心に巣食う鬼たちの跳梁跋扈を捉えるものでもあった。圧巻だったのは、次第に増幅していく音塊とともに姿を現した鬼神像。音と身体の化合が生み出した幻像に、思わず身震いした。(能登原由美)」

ディミトリス・パパイオアヌー「少なくとも私にとって TRANSVERSE ORIENTATION とは、ポストヒューマンについて真摯に語らなければならなくなった時代における、その倫理と美学を考えるための、身体を含むインスタレーションの集積、であった。(保坂健二郎)」

・木ノ下歌舞伎 「京都府視覚障害者協会」「京都市聴覚言語障害センター」などの関連団体に鑑賞サポートの情報を提供、当事者に来場いただき観劇後に意見を伺う機会を持つことができ、アクセシビリティにおけるノウハウの蓄積に繋げることができた。

### ●【人材養成事業】

・劇場の学校 劇場の学校 2022 報告書によると、「新しく人とのつながりが出来た」「舞台芸術への興味・関心が高まった」のポイントが例年より上昇している。劇場で実施するからこそその学びの場が生成されていると手ごたえを感じている。

—受講者アンケートより抜粋—

・「それぞれの想像が重なり合う時に広がっていくのがいいなと思いました。劇場は想像がたくさん詰まってできていくんだということを考えせられました」「体と場所さえあれば踊れるということに気付きました。日常の動きでさえもダンスになるのだと感じました」「いろんな人のパフォーマンスを見たり、自分がメディアを通して誰かに何かを伝えたりを通して、こんな表現のしかたもあるんだと新たな発見ができ、自分の将来、人生にも影響したと思います」

・リサーチプログラム 劇場における研究・調査と実践をつなぐ本事業は、国内においては類似事業がほぼなく、当劇場の特色を打ち出したものになっている。

### ●【普及啓発事業】

プレイ!シアター in Summer や伝統芸能入門講座といった継続事業は情報公開前から問い合わせが入るなど、それぞれ定着してきた実感がある。シアターデビュー促進プログラムでは、子どもたちが作品に参加できるような仕掛けを設けたことで、「コロナ禍で育った子供達は制限や禁止に慣れ過ぎて、いい子が過ぎている。自由な表現とても新鮮でした。このような交流が繰り返されることで子供達がのびのびできると思います」といったアンケートによる好意的な声が寄せられた。ホリデーパフォーマンスでは、施設利用者がふらりと立ち寄り観賞する姿がみられ、日常のなかで芸術と出会う契機となっている。こうした普及啓発事業を今後も継続することで、地域の文化芸術の発展に寄与していきたいと考える。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

令和4年秋には、指定管理期間(令和元年度～令和8年度)の中間年の自らが行った中間評価等に係る、外部有識者による意見聴取が実施された。結果としては、「事業及び管理運営に関する取組及び課題、指定管理者としての取組実績等に加えて、新型コロナウイルス感染症による影響と対応についても的確に自己評価されており、高く評価できる」とされた。また、後半4年間に向けた提案は、「世界市民のための劇場」を事業コンセプトとし、それぞれの事業を「つながり(交流)」の下で、「つくり(創造)」、「育て(育成)」、「活かす(生活／普及)」、要素を循環しながら発展させていくという、指定管理者の果たすべき役割をしっかりと認識した内容となっていると認められた。

また、ロームシアター京都を運営する、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団は、「中期経営計画2025」(令和4年3月発行)を策定し、2022年度から2025年度までの4年間の方針を定めている。京都市の文化芸術のインフラの経営を総合的かつ安定的に展開し、経営基盤を強化するため、組織運営に関して「職員一人一人の更なる活躍による組織の自立性と活力の向上」「組織人員体制・配置等の最適化」「リスクマネジメントの推進」の3つの方針を推進している。財務運営に関しては、「当財団全体の財務管理の強化」「ファンドレイジングの推進」「ICT環境整備による財務の合理化の推進」を重点取組としている。

PDCAの流れは、理事会を中期経営計画及び年度事業計画の承認・評価の最高機関として、計画の進捗確認・年度評価及び事業計画の作成・進捗確認・年度総括、各事業の実績報告・事業評価は各部門の責任者で構成する月例会を行っている。この計画の各部門の方針のもと、設置者である京都市からの指定管理料、各所からの助成金、協賛金、寄付会員からの支援を得、持続的に発展することができる組織運営を行っている。

そして、公益社団法人全国公立文化施設協会や公共劇場舞台技術者連絡会、劇場、音楽堂等連絡協議会(劇音協)への参画、各事業を通じた取組により、他地域の劇場・音楽堂や教育機関等関連団体との関係が強化されている。地元アーティストや近隣文化施設と共に地域活性に資する事業を行うと同時に、海外招聘公演を積極的に行い、そのネットワークはローカルにも、グローバルにも広がっている。

平成4年3月には、ロームシアター京都において、「ハラスメント防止ガイドライン ～ロームシアター京都に集う全ての人のために～」を策定した。職員向けのガイドライン「公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団ハラスメント防止に関する指針」(令和2年8月1日策定)と合わせて運用し、今後ロームシアター京都が身体的・精神的に安心安全な劇場であり、「憩いの場」として機能していくため、職員研修といった館独自の学びの場を設けるだけでなく、京都の創作・上演環境の向上を目指す人々とも共に考える場を催すなど、ハラスメントの起こらない環境づくりに努めている。

当財団が実施したインターネット調査の結果では、対象者の78.4%が「京都にロームシアター京都があることに対して、愛着あるいは誇りがある」と答えている。(令和3年3月実施調査)他の比較データがないため、分析が難しいところはあるが、我々としては、高い期待と注目を感じている。令和8年1月に迎える開館10周年に向けて、さまざまな人々との関わりを増やしていくことによりニーズや課題を的確に捉え、地域に必要な劇場の役割を担っていく。